FORMAÇÃO DE NOVOS FACILITADORES
PARA O INTERCÂMBIO JAPÃO-BRASIL

Bambu

a revitalização de uma comunidade

1ª EDIÇÃO

14/2/2020 a 19/2/2020

第一回

1ª EDIÇÃO

日伯交流ファシリテーター養成プロジェクト

FORMAÇÃO DE NOVOS FACILITADORES PARA O INTERCÂMBIO JAPÃO-BRASIL

- 竹がつくる村おこし -

- BAMBU: A REVITALIZAÇÃO DE UMA COMUNIDADE -

２０２０年2月14日 〜 19日

ブラジル・サンパウロ州・バウル市

主催: 国際交流基金サンパウロ日本文化センター
所長: 洲崎勝
副所長: 山雄起

デザイナー: Ronni Massashi Guiotoko
広報素材: Amy Maitland
撮影: André Sanchez
ポルトガル語　原文: Ellen Sayuri Okido Matsumoto / Ronni Massashi Guiotoko
ポルトガル語　原文チェック: Grace Nakata
掲載:2020年

日本語翻訳:Pablo Kadji Yuba

長く豊かな交流の歴史を共有する日本とブラジルは、21世紀の複雑な国際環境において益々お互いを理解し友情を深めることが期待されています。その中心的役割を果たすのは両国の有為な若者達にちがいありません。

この度国際交流基金サンパウロ日本文化センターは、UNESPと共催しSESCの協力を得て、両国の若者が「竹を使った地域おこし」について専門家の話を聞き、解決策を議論し、アートを制作する場を提供する「日伯次世代ファシリテーター事業」を実施しました。参加した若者たちは文化の垣根を越えて協働することで友情をはぐくみ、両国の交流を促進するファシリテーターとしての共感を得たようです。

彼らがどのような議論をし、何を実践したのかを皆様に報告するためこの報告書を作成しました。国際交流基金サンパウロ日本文化センターはこの事業を継続していきたいと考えます。多くの皆様からのご意見とご支援をお待ちしております。

独立行政法人
国際交流基金サンパウロ日本文化センター
所長 洲崎 勝

目次

はじめに.....02

プログラム.....04

参加メンバー.....06

現場視察.....09

講演会.....13

円卓会議.....25

ワークショップ.....37

講演：竹の用途の多様性.....43

次世代ファシリテーターたちからの感想.....45

結果.....59

はじめに

次世代リーダーズセミナー

「日伯交流ファシリテーター養成プロジェクト -竹がつくる村おこし-」

竹：コミュニティの再活性化

国際交流基金サンパウロ日本文化センターが主催する「日伯交流ファシリテーター養成プロジェクト-竹がつくる村おこし-」は、日本とブラジルに共通するテーマや課題を取り上げ、若者が議論するなかで、両国の文化・知的交流の架け橋になることができるファシリテーターの養成を図るプログラムです。第一回目となる本プロジェクトは、サステイナビリティとソーシャルデザインの観点から、ファシリテーター達の自然保護とコミュニティーの活性化に対する意識の向上を図りました。

事業の協力団体はバウルー市近郊の農地改革集落「Horto de Aimorés」の竹職人が所属する農業生態協会「Viverde」と、その活動を支援しているサンパウロ州立大学（以下、UNESP）内のプロジェクト：「ProjetoTaquara」です。当該地では、数年前から竹の商品開発やその生産工程に係る職人たちの能力向上のため、サンパウロ州立大学の支援活動が行われていますが、組織的な課題もあり、職人達が完全独立するまでには至っていません。

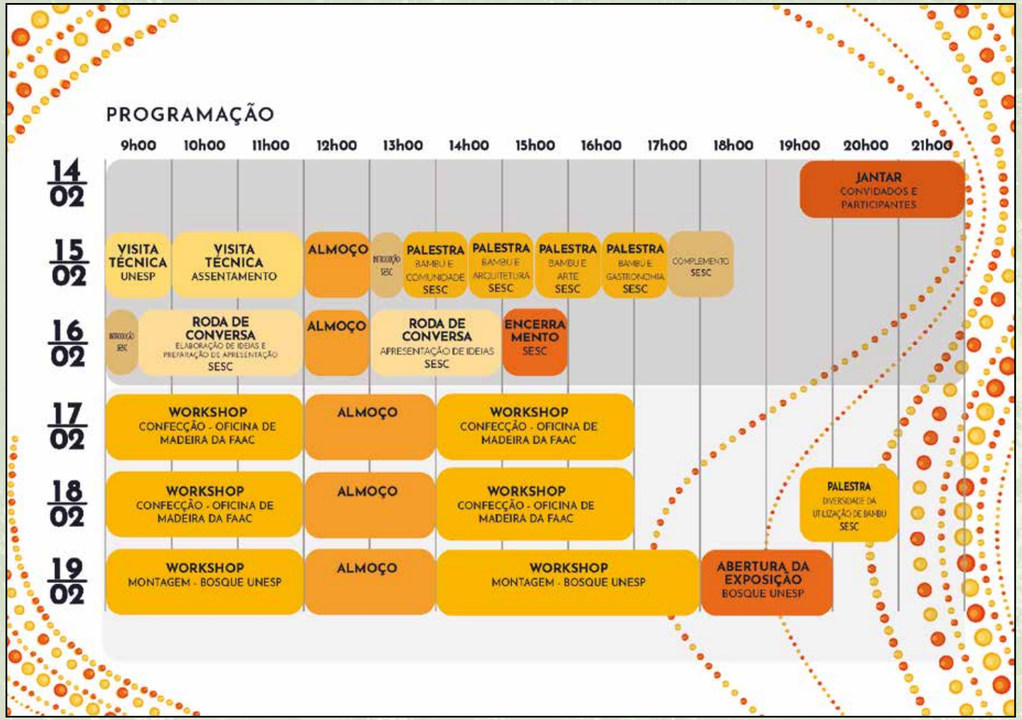
今回は次世代のファシリテーター候補として、サンパウロ州のサンパウロ市やソロカバ市、バウルー市から様々な分野で活躍する12人の若者を選ばれ、彼らが「農業生態協会Viverde」等の現場を訪問し、それぞれの観点から竹を使ったコミュニティー形成について新たなアイディアを考え、紹介しあうことで、「農業生態協会Viverde」協会の発展に貢献することが意図されました。

当該事業は理論編と実践編の二部構成で計画されました。理論編では12人のファシリテーター候補が様々な知識を得られるよう、「農業生態協会Viverde」とサンパウロ州立大学の「ProjetoTaquara」を訪問（現場視察）し、その後竹に関する4つの講演を聞き、竹の持つ多くの可能性に触れました。そのうえでファシリテーター候補が議論を行い、最後に竹を活用したコミュニティー形成について、それぞれのアイディアを紹介する発表会議を行いました。

実践編では、竹を使ったインスタレーション「竹あかり」の演出制作プロデュース会社CHIKAKEN代表の三城賢士氏を招き、実際に「竹あかり」を作るワークショップを実施しました。そしてそのワークショップの成果物を使って「竹あかりフェスティバル」をサンパウロ州立大学内で開催しました。

関連企画として、バウルーの文化施設SESCにおいて、橋口博幸氏が、「竹の精神性と多様な用途」をテーマに講演を行いました。

プログラム



DESIGN: Amy Maitland

円卓会議

主催: 国際交流基金サンパウロ日本文化センター / Unesp Bauru - FEB Unesp
協力: Sesc - Unidade Bauru e Clube Cultural Nipo Brasileiro - Bauru
コーディネーター: Silvia Sasaoka
ファシリテーター: Kyoko Hirano e Silvia Sasaoka

講演者

- Marco Antonio dos Reis Pereira (博士 / UNESP工学部バウルーキャンパス機械工学学科)
- Danilo Candia Barbosa (CARBONO ZERO社代表ディレクター)
- 三城賢士 (竹あかり演出家　CHIKAKEN 代表)
- いしづ あきこ (料理研究家/管理栄養士/フードコーディネーター/得意:日本・ブラジル家庭料理)

特別参加者

- 橋口博幸 (竹文化研究家(愛竹家)、ライター)

日伯交流ファシリテーター

- 藤井勇人 (隈研吾建築都市設計事務所ブラジル担当室長)
- Leonardo Inomata (弁護士・ブラジル日本青年会議所(JCI Brasil-Japão)求人部長)
- Murilo Furlan Mellio (サンパウロ大学大学院修士課程生日本文化・文学・言語専攻)
- Mateus Gambaro Ramos (SMART CAMPUS FACENS(ソロカバ工業大学)所属)
- Rafaela Yumi Tanaka (サンパウロ大学建築都市計画学部)
- Gabriel Fernandes dos Santos (UNESP大学院博士課程商品開発専攻)
- Eduardo Miguel (設計エンジニア)
- João Victor Gomes dos Santos (UNESP大学院博士課程デザイン・人間工学准教授)
- Laura Camargo Ribeiro da Silva (デザイナー、フォトグラファー)
- Anderson Augusto Fabri (建築学学部生/Angico do Cerradoコミュニティ協会所属/家具職人・建具職人)
- Cibele Mion (SESCバウルー文化ファシリテーター)
- Amy Maitland (デザイナー)

ワークショップ
竹あかり

主催: 国際交流基金サンパウロ日本文化センター / Unesp Bauru - FEB Unesp
協力: Laboratório Didático de Materiais e Protótipos - LDMP, Faac Unesp Bauru, Clube Cultural Nipo Brasileiro - Bauru
コーディネーター: Silvia Sasaoka
ワークショップ: Kenshi Mishiro
アシスタント: Hiroyuki Hashiguchi
協力者: Gabriel Fernandes dos Santos, João Victor Gomes dos Santos, Rafael M. Sette, Túlio Sacchi dos Santos e Laura Camargo Ribeiro da Silva

講演会
竹の用途の多様性

主催: 国際交流基金サンパウロ日本文化センター
協力: SESC - Unidade Bauru
講演者: 橋口博幸 (竹文化研究家(愛竹家)、ライター)

感謝

Prof. Luttgard de Oliveira Neto, Prof. Marco Antonio dos Reis Pereira,
Prof. Tomás Barata, Sérgio Ishikava, Shozo Nakamine, Kyoko Hirano, Kiyomi Ishikawa,
Etsu Munhoz e Associação Agroecológica Viverde.

現場視察

2020年2月15日
UNESPバウルーキャンパスにおける「Projetobambu」関連施設〜農地改革集落「Horto de Aimorés」

2月１５日午前にUNESPの竹加工ラボから始まり、「ProjetoTaquara」プロジェクト、校内で竹栽培を行っている農業エリア、そして最後に農地改革集落「Horto de Aimorés」の農業生態協会「Viverde」の作業小屋を訪問するツアーを実施した。

UNESP バウルーキャンパス
木材・竹加工ラボ

ラボ訪問は同大学の教授であり「Projetobambu」顧問及びと公開講座「ProjetoTaquara」を担当するマルコ・アントニオ・ドス・ヘイス・ペレイラ博士の案内で行われた。ペレイラ博士は30年前に同大学のバウルーキャンパスで竹の栽培を開始した。博士は栽培を始めるにあたり、国際竹藤ネットワークINBAR (International Network for Bamboo and Rattan)が推薦する優占種(priority species)の研究とブラジル国内における竹の商業利用に関する実態調査も実施した。

世界各地に存在する1300種類の竹のうち、バウルーでは35種類栽培されており、そのほとんどはアジアやコロンビアに由来する種である。当時UNESPでは竹を栽培していなかったため、ペレイラ博士は積極的に栽培に取り組む必要があった。バウルー市はセラード(ブラジルのサバンナ)に囲まれており養分は比較的少く、年間降水量は1300mm、年間平均温度は23℃であり、熱帯性/非侵襲性の植物栽培に有利な地域である。そのため他の土地へ侵入(侵食)しやすい竹はリスクが高く、栽培されていなかった。

公開講座「Projetobambu」は学生たちが竹の商品開発を行う場である。ラボ内ではプロトタイプの製作に加え、耐久性テストを始め様々な実験が行われている。こうした研究は国内では未だに少ないとされており、UNESPの大学院の一科目程度でしか研究されていない。

同ラボは竹に関する知識を広めることを目的としており、教育機関.学校を始め資金不足のエリアや労働協会、農地改革集落などで活動している。農地改革コミュニティー「Horto de Aimorés」支援もその活動の一例であり、その農業生態協会「Viverde」は既に独立して活動しているが、コミュニティー内では、この活動に参加していない世帯が多く、彼らをどう巻き込むかが大きな課題となっている。もう一つの課題はそこで開発されたものをどのように市場に展開するかである。

ペレイラ博士による「ProjetoTaquara」の成果は、コミュニティーの竹職人と学生との共同開発として学会やイベントなどで紹介されている。2008年には著作 “Bambu de corpo e alma” (身体と心の竹)を出版し、竹の研究と竹文化の普及活動を行った。。25年前に自ら竹で建てた自宅は、現在も健在である。博士は竹という素材を操る技術は豊富に存在し、多くのポテンシャルを秘めていると言う。

機械室には加工用機械などがあり、プロトタイプの開発などが行われている。室内にある機械のその殆んどが一般仕様だが、竹専用のものもいくつかある。視察時には、竹専用の機械の他にトウゴマの樹脂(およそ5%)を使って加工を施した竹製の板やプレートが紹介された。竹の小割板の防虫加工には、自然環境への負担が少ない八ホウ酸ナトリウムが使われている。

UNESP バウルー・キャンパス
農業エリア

農業エリア (UNESP機械工学部農業実験地)では博士課程の学生でデザイナーでもある ガブリエル・フェルナンデス・サントス氏が2018年に実験的に自ら作成した竹の小屋を紹介した。この建物は彼が2017年に修了した修士課程の課題であり、FAPESP (サンパウロ州研究財団)の助成金を得て完成した。作成効率の良さと材料の無駄が少ないことをテーマに、都市部や農村地の貧困コミュニティー向けに考案されたものである。設計段階から完成するまで建築家のマノエル・ロドリゲス氏との共同作業で行われた。五つの組み立てユニットパネルが設計され、合計14のパネルで小屋がつくられている。サントス氏は強力な紫外線への対応と竹の湿度調整が最も困難な課題であったとコメントした。 その後竹林へ移動し、ペレイラ博士の案内 によりデンドロカラムス・アスペル種(巨竹、像竹)の栽培を視察した。竹の茎には竹の年数を記録するための数字が振られており、成熟したものが収穫されている。見栄えのいい竹を使いたくなりがちだが、そういった竹はまだ若く十分な耐久性が無い旨、ペレイラ博士から説明があった。ここの竹林は20年前から管理されており、今回の「竹あかり」フェスティバルで使用された竹は、この竹林から切り出された。

竹の熟成には8年の年月を要するので、商業利用向けに加工できるのは8年目以降のものである。竹には4世代ごとに曾祖母、祖母、母、娘というように名前が付けられている。様々な加工法が存在するが、この竹林で は耐久性に優れ、芽を出さなくなった曾祖母竹のみを使っている。竹が開花することはほとんど無いそうだが、2年前に栽培地の一種が開花し多くの種が作られた。

農地改革コミュニティー
「HORTO DE AIMORÉS」

農業生態協会「VIVERDE」

農業生態協会「Viverde」ジョゼ・マリア・ロドリゲス会長が、ファシリテーター候補者など本プロジェクト参加メンバーを出迎え作業現場を案内した。協会発足当初現地で生産しているオーガニック農産物を運ぶ輸送箱が必要となり、その箱を竹でつくるという案が出たが、その後コミュニティーの住民に竹の多様な可能性が紹介されてきた。 やがて竹製の作業小屋が設計され、UNESPから教授や学生が、さらにコミュニティーの住民がボランティアとして建設に協力した。この小屋で公開講座「Projetobambu」の内容が同コミュニティ内に展開されている。コミュニティーでは当初150種の竹が植林された。数々の補助金やプロジェクト助成プログラムに申請し、機材や道具を揃え、2011年に竹の作業小屋が開所した。栽培を始め竹の収穫、加工、部品作成などすべて現地で行い、材料は無駄なく利用されている。開所間も無く大手スーパーマーケットグループのPão de Açucarと竹製食器の発注契約を結んだ。

現状の問題点として資金不足と現地の住民の参加率の低さが挙げられる。説明会などの普及活動が行われているが、竹の商品化による金銭的な価値がなかなか認識されていない。コミュニティの地形的特徴も大きな課題である。コミュニティー内の集落の間をバウルー川が流れており、橋が無いため集落内の移動や連絡が困難な状態にある。集落内では他に現地学校の給食用の野菜を提供している団体もあり、そこへの発注がかなり増えている、さらに現在150から200箇所の竹林があるが、今後プロジェクトを進めるためにはさらに竹を増やす活動が必要で資源不足が問題視されている。

こうした課題を抱えつつも、「Viverde」はUNESPの組合インキュベーターを始めバウルーのSESC(商業連盟社会サービス連盟)など外部組織とも提携し、小規模な建物や竹塀などの商品開発　を通し竹が持つ可能性を広めている。 使用する竹はすべて潜水もしくは圧力加工(Bouchérieメソッド)ででん粉を取り除き、八ホウ酸ナトリウムを注入し、ヒラキクイムシなどから守るべく防虫加工を施している。その後竹を脱水・乾燥し、食器として利用する場合は亜麻仁油を塗布している。

コミュニティーのある土地は2003年に農民運動に占拠され、農地改革集落となった。住民の大多数が遠い地方から移住してきた。連邦政府はこの土地を1800万レアルで購入し各世帯に振り分けた。土地の転売は禁止されているので、何世代にも亘り所有されることになる。住民の多くは社会的特権である健康保険、食費手当て、移動手当て、現金給付などの補助を受けておらず都市部　に勤めている。 土地は砂地で土壌有機物は豊富ではないが、竹の栽培には有利である。以前は主にユーカリが栽培されていたが、UNESPが竹の苗を手配し、ペレイラ博士が栽培の指導を行った。竹はユーカリよりも成長が早く、毎年収穫が可能で植替えの必要もない。さらに竹林は大気中の二酸化炭素を多く吸収する効果がある。

講演会

2020年2月15日
SESC - Unidade Bauru

SESC BAURUにて以下4つのテーマで講演会が行われた。
（1）竹とコミュニティ、（2）竹と建築、
（3）竹と芸術、（4）竹と料理

BAMBU
竹とコミュニティ
COMUNIDADE

マルコ・アントニオ・ドスレイス・ペレイラ博士
UNESP工学部バウルーキャンパス機械工学学科

ペレイラ博士は、竹は生物的、物理的、化学的、さらには技巧的にも優れているが、ブラジル国内では十分に研究されていない、その原因に竹の可能性の認知不足があると主張した。

博士は竹文化の普及活動を目的として、1990年に「Projetobambu」を立ち上げた。同プロジェクトは次の6つのステップで構成されている。(1)竹への入門と各種の栽培、(2)茎の取り扱い、(3)竹の用途別加工(物理的・機械的・水力的加工)、(4)加工一板、BlaC、(5)工芸品、加工品、軽量な建造物の製作、(6)養成・普及・候補・公開講座活動。

国際竹籐ネットワークINBAR (International Network for Bamboo and Rattan)が推薦する優占種を栽培し、正しい取り扱いをすることによって商品として成り立つ良質な竹を育てている。そのために研究の一環として実施されたのが、高さ、直径成長指数や土地への適応度の研究である。適正な取り扱いの結果及び成功事例として一度竹林で火災がおきたものの周りの落葉や落枝以外に被害が及ばなかったことがあげられる。竹林では34種の竹が栽培されており、そのうち1種はコロンビア、もう1種はブラジルで、それ以外はアジアの種にもかかわらず、ブラジルの環境に完全に適応している。

1992年に最初の企画を実行した。地元の小規模な農家向けに、低コストで製造可能

なデンドロカラムス・ アスペル種(巨竹)製の水路・灌漑システムの構築である。プロジェクトは成功し、物理的にも水力的にも良い結果がみられ、1995年には国内大手テレビ局グローボ社の番組Globo Ruralで取り上げられた。

竹栽培を持続させるために、竹の収穫は熟成したものに限定され、若い竹はそのまま竹林で成長させる。収穫した竹は用途別に適正な大きさに切断し、樹液の入れ替え加工(ボシェリ方式)もしくは八ホウ酸ナトリウムに沈めて加工する。脱水・乾燥を終えれば、ものづくりに使う準備が完了する。

竹ラミネートシート(BLaC)を作るには、竹を機械に通し細長い板へ変形させ、板を重ねて接着し、圧縮機にかける。板に曲線が必要であれば特定の型を使い、熱を調整しながら形付けをする。ここで使用する竹の耐久性や物理的な指標測定に関する専門的な調査や研究は未だ乏しいため、基準や規定は木材のものを参考せざるを得ない。

続いて「ProjetoTaquara」が紹介された。農地改革コミュニティー「Horto de Aimorés」に竹文化を導入する同プロジェクトは過去に表彰歴もあり、これまで生物学部をはじめ建築学部、工学部、デザイン学部などからのべ150人近い学生が携わってきた。コミュニティー内では20世帯で竹文化の訓練を行い、訓練を受けた住民たちは現地の竹文化普及サポーターとして活動している。また、すべての工程を管理するために立ち上がったのが農業生態協会「Viverde」である。彼らは徐々に仕事の依頼を受け始め、UNESPからも、キャンパス内の休憩スペースを受注した実績がある。

プロフィール

Unicamp(カンピーナス州立大学)の 農工学部卒業後、修士課程、博士課程にて竹の加工や操作をテーマに研究し、著書に”身体と心の竹”がある。1988年よりUNESP工学部バウルーキャンパス機械工学学科准教授・特任教授。専門分野は流体力学、移動現象学、灌漑工学。同大学のデザイン学科大学院では”竹を使ったデザインと建設”をテーマに学部生院生共に研究を指導している。公開講座では農民集落における竹文化の啓蒙活動を行い、竹を使った所得の創出を実現する。竹文化に関する研究実績が豊富。優占種の植え付け・栽培、竹茎の操作、苗床、竹製水路の灌漑、竹の特性評価(水圧・物理・機械)、竹ラミネートシート(BLaC)を使った製品開発、軽量な建造物の製作。

BAMBU
竹　と　建　築
ARQUITETURA

ダニーロ・カンジア・バルボーザ
CARBONO ZERO社代表ディレクター

２０００年から竹と関わり、２００７年にBambu CARBONO ZERO社を設立したバルボーザ氏が発表した。同氏は、竹が建築業界で大きな可能性を持つと考えており、竹が鋼鉄やガラスファイバー、カーボンファイバー及び木材と同等の役割を果たすことが可能だと主張しました。

同氏のキャリアに影響を与えた設計のいくつかの建築作品が紹介された。まずは竹とコンクリートを併用して国際的に評価されたコロンビアの建築家シモン・ベレズの作品が紹介された。そして世界最大の竹製建築物とされる5，０００平米の移動式博物館Nomadic Museumと続いた次に、ベトナム出身の建築家ヴォ・チョン・ギア氏の作品が紹介された。ヴォ氏の作品は、竹の曲線とその竹を縛る結びの技術が特徴的である。。地面から天井まで竹の螺旋が広がるベトナムのコーヒーショップやRoc Von レストラン、Eco Resort Pavillionホテルが取り上げられた。

ヴォ氏の作品に続き、ほぼ１００％持続可能な素材を使用し、主に竹で作られたバリ島のGreen School（ジョン&シンシア・ハーディー）と国際竹籐ネットワークINBARの本社に大きなアーチを描くBamboo Eye（マウリシオ・カルデナス・ラベルデ）も紹介された。

バルボーザ氏本人が代表を務めるCARBONO ZERO社の活動紹介では、市場の需要への対応が如何に重要かが強調された。同社が扱う商品は様々であり、建物の体型部分に使われるものから表面的なコーティング、敷物、竿、デッキ等に使われる竹の板などを例示した。

会社の活動の一事例として、都市部から遠く離れたサンパウロ州クーニャ市のある村の母娘の動画が紹介された。そこでは内装用の敷物が作られており、それが家族の収入となっている。市場の需要を理解することができれば、竹製品には価値が付くという例である。

講演の結論としてバルボーザ氏は、竹に関する専門的な研究が不十分であることを指摘し、その結果政府への支援を申請しづらく、法律や当局との規制交渉が困難になっているという現状を語った。

プロフィール

1987年にUNESPバウルーキャンパス農工学部卒業

サンパウロ州クーニャ市で竹製品を扱い始め、現在では年間5万枚の敷物を生産する。売上は年間８０万レアル。リオ・デ・ジャネイロ州アングラドスレイス市でシモン・ベレズ設計の建築に竹製資材を提供した。２００７年にコロンビアのペレイラ技術大学で竹の特別講座を受講。同年、竹製の建設資材専門会社（構造・表面加工）BCZ BAMBU CARBONO ZERO設立。

BAMBU 竹とアート ARTE

三城賢士
竹あかり演出家　CHIKAKEN 代表

竹あかり演出家で「株式会社ちかけんプロダクツ」代表取締役の三城賢士さんによる「Bambu e arte」と題した講演をお願いしました。講演では竹あかりがどのようなものかを見せるために小さな竹あかりを見せていただきました。三城さんは崇城大学工学部建築学科在学中に祭りを通して地域の人たちと、どのように竹を地域活性化に繋げることができるのかを考え始めました。

「日本では若者がどんどんと田舎を離れ大都会へ移住しているので、人口減少による地域の衰退が問題になっています。地域によっては活性化の予算も少ないので、常にその予算や状況に合わせて演出を考えています。竹あかりを使った祭りは外見の魅力で観光客を魅了し、コミュニティーを結集させ、地域の団結力を高めます。

「大学時代に地域の活性化に積極的に力をいれている学生が集まりはじめました。ボランティア活動として始まったものが、様々な困難を乗り越えて今の「ちかけん」とういう会社になりました。竹あかりは各地に広まり、飾りとして多く使用されています。例えば、東京ディズニーランドや日本のアニメの「サザエさん」などにも出たことがあります。しかし今のところはビジネスとして特に高額な収入源を得るのは困難です」

「それでも、竹あかりの価値を高め、輪を広げることで多くの方々に驚きや感動を感じられる為に、『ちかけん』は日本各地でイベントやワークショップを行っています。それを行うことで、竹あかりの文化の価値を創出されます。」

講演会では私的な場所や公共空間で実施された竹あかりのプロジェクトが紹介されました。祭りを定期的に行うことで、住民たちが町おこしという目的を共有し、団結力が高め、結果的に好奇心を刺激し、芸術理解も増していくと話されました。

「企画段階には欠かせない質問があります。そこにしかない物語とは？なぜ竹あかりを灯すのか？いつ、灯すのか？どこに、灯すのか？どんな竹あかりをつくるのか？誰がつくるのか？どのくらいつくるのか？質問することで、その住民の土地に対しての想いや価値観が変わっていくように思われます。」

「最近では地域コミュニティーのリーダー的な人と連絡をとり、次の年はどのような新しいアトラクションを追加するのかを相談するようにしています。常に新しいものを加えることで人々の好奇心が生まれ参加者も増えていきます。地域住民が普段気付かないような地域の特色を加えていくことも重要です。ただ単に竹に穴開ける作業ですが、それは様々な可能性をもたらします。そしてその作業は誰でも参加できるものなのです。

実施された数々のプロジェクトの中の一例として「伊勢志摩サミット・配偶者プログラム夕食会場」での竹あかりデコレーションを紹介いただきました。

「会場のデコレーション以外にも、総理大臣夫人と関係者の方々と竹あかりを一緒につくりました。作り方をお教えながら竹あかりを社会や文化の活性化に活用できることを話すこともできました。」

学校行事やワークショップなどで、参加者一人一人が作った小さな竹あかりが最後に一緒に並べられて灯されたときに新しい美しさが生まれたケースも多く紹介されました。三城さんの活動は日本だけにとどまりません。フィリピンや中国でもワークショップを実施し、その翌年には現地の人たちだけで祭りを実施しました。デザインなどのクオリティーはまだ伸ばせることが出来ると思われるので日本人が指導者として参加することも考えたいとのことです。ただ三城さんとしては海外の方々自身が実施することでそこにしかない魅力も尊重したいと語っていました。

最後に、三城さんからちかけんの３つの柱について語って頂きました。

「日本文化としての和を広げること、持続可能な環境の環を広げること、そして人と人とのつながりの輪を広げることです。この考えを世界中に広め、竹あかりの文化を世界各地に知って頂くことを目指しています」とのことでした。

講演後には参加者から質問がありました：

Q　どのように地域住民の方々にワークショップに参加してもらうのですか。ワークショップの後に進展などがありましたでしょうか？作り方はどうやって教えるのでしょうか？

A　ケースバイケースでアプローチが変わります。（参加者のハードルを下げるため）一人で一本作るのが難しい場合は作業分担して作業を軽くすることもあります。予算が本当に少なくて我々に依頼できない場合は、ネットにある作り方の動画を参考にして作るよう勧めたりもします。

Q　イベント後の竹あかりはどのように処理されるのでしょうか？

A　イベントによります。竹炭や肥料として処理することが多いです。

Q　竹あかりのデザインに何か参考として使っていますか？

A　参加者が感じられるような地域ならではの伝統的なデザインを使います。そして、そのデザインが参加者に適合しているかも重要ですいろいろな人の作品が組み合って出来上がるものが多いです。

Q　社員は何人いますか？また収入源はどのように別れていますか？

A　社員は全部で7名です。お祭りやイベントの収入が７０％で残りの３０％はワークショップです。時期によって収入は左右されます。

Q　イベント日に雨が降った場合はどうされていますか？

A　予め運営側に、雨によって作品にカビが生えるリスクが伝達されます。その情報に基づき、会場によっては悪条件に適応して設営場所やデザインを変更することがあります。

プロフィール

１９８２年、熊本県阿蘇市生まれ。崇城大学の内丸惠一研究室にて学んだ「まつり型まちづくり」をベースに、相方・池田親生（ちか）と共に、2007年4月、「竹あかり」の演出制作・プロデュース会社「CHIKAKEN〈ちかけん〉」を設立。熊本を拠点に全国各地で「竹あかり」を灯し、その土地にしかない“風景”と“物語”を創りつづけてきている。「人と人・人とまち・人と自然」を繋ぐ「竹あかり」が一過性の「事業」として消費されるのではなく、新たな日本の文化として受け継がれることを目指す。２０１７年５月のG7伊勢志摩サミットでは、配偶者プログラムの夕食会場の演出を手がけ、２０１８年１０月には、中国初の竹あかりのまつり「開竹祭」の演出プロデュースを行う。

BAMBU
竹とガストロノミー
GASTRONOMIA

いしづ あきこ
料理研究家/管理栄養士/フードコーディネーター
得意:日本・ブラジル 家庭料理

当日、最後の講演会は、料理研究家・管理栄養士・フードコーディネーターのいしづ　あきこ様に「Bambu e Gastronomia　～タケノコ・竹の新たな可能性を食の視点から考える～」について講演を行っていただきました。彼女は日本でテレビ番組や雑誌などの料理に関わる仕事や料理教室をされていて、現在は旦那さんの仕事の関係でブラジルに駐在し、日系の方々に日本の家庭料理を伝える活動をしておられます。

日本では、日本最古の歴史書とされる「古事記」にもタケノコの記述があり、今から1300年以上前にはすでにタケノコを食用としていました。日本で一般的に食べられている種類は孟宗竹（もうそうちく）、真竹（まだけ）、淡竹（はちく）で、旬の時期である3月から5月には新鮮なものが出回ります。春の訪れを告げる食材とも言われています。他の時期にはスーパーなどでレトルトパックの水煮タケノコを年中購入することができます。タケノコを使った代表的な家庭料理として若竹煮やたけのこご飯などがあります。

ブラジルでは一般的な食材ではありませんので、スーパーなどではごく一部でしか手に入りません。ただ、私がサンパウロにある日系スーパーに聞いたところ、新鮮なタケノコは主に12月から2月に入荷するとのことで、タケノコの種類は複数あります。

新鮮な生のタケノコを調理する際のポイントとして手に入れたらできるだけ早く下茹ですることが大切です。米のとぎ汁で1時間程度やわらかくなるまで茹でて火を止めそのまま冷ますことでタケノコのえぐみが取れます。下茹での後には冷蔵や冷凍保存もできます。切り方は上の部分は繊維に沿って縦に、根元の硬い部分は繊維を切るように横に切るのが一般的です。

タケノコは、ユリ科の野菜（アスパラガスやニンニクなど）や、同じイネ科の米・麦などと特に相性がよいとされています。また、カルシウムを含む食材と組み合わせることでタケノコのアクの原因であるシュウ酸の体内への吸収を減らすことができます。

タケノコには旨味成分が多く含まれていて、食感はヤシの新芽に似ています。適切に殺菌消毒した瓶に水煮を保存すると一年程度の長期保存が可能になりますので、ヤシの新芽のように商品としてもブラジルで一般的に好まれる可能性のある食材だと思われます。

ブラジルでタケノコを広めていく方法として、例えば、Festival do Japão(日本祭り)などでタケノコブースを出店し、タケノコを使った料理・タケノコの水煮・タケノコを使用した嗜好品（タケノコチップスなど）・竹細工などを販売すること、また、SNSや動画配信で宣伝することでもっと多くの人に知って頂けると思います。タケノコ専門店や料理教室、また、子どもから大人まで参加できる収穫祭り＆調理体験をパウル市などで開催するなどもいい案だと思います。

竹は抗菌性・脱臭効果もあり軽くて加工製の高い素材ですので、日本では、盆ざる・巻きす・茶せん（茶道具）・食器など、様々な道具で活用されています。また、竹皮はおにぎりを包んだり、流しそうめんなどでも竹を使用しています。

今世界的な動きとしてプラスチック製ストローの廃止の動きが進んでいます。

他のプラスチック製ストローの代用品としては様々なものがありますが、その中でも使い捨ての竹製ストローは、持続可能かつ、衛生面でも優れた代替手段となりうるのではないかと思います。

2021年以降はサンパウロ市で使い捨てのプラスチック製の食器などが飲食店・イベント会場で使用が禁止されますので、その代わりとして竹製の食器などを利用することができないかと考えます。

竹製品を有効的に使用することが、社会や環境問題を解決する一つの手段になると信じています。

プロフィール

大学で栄養学を学び卒業後は大手食品メーカー キユーピー株式会社に勤務、結婚に伴い退社。ブラジルに駐在し、帰国後は料理研究家きじまりゅうた氏　のもとで長年チーフアシスタントとして、TV、書籍、雑誌などのメディアや料理教室、イベントなど様々な現場で経験を積む。自身でも料理教室を主宰。

現在、2度目のブラジル駐在中。ブラジル料理を、現地の料理学校・ホストマザー・ブラジル人や日系人の家庭などで積極的に学んでいる。ブラジルの食文化、料理、食材について書籍や資料で研究したり食べ歩きを通して日々ブラジル料理を探索中。

日系人やブラジル人に、ブラジルにある食材を使って、日本の家庭料理を伝える料理教室やイベントを定期的に開催。

また、日本に向けて、ブラジルで一般的に食べられている料理を日本人の味覚に合わせて紹介したりブラジルの食文化や栄養豊富な食材を広めるために、ブラジルイベントも不定期で開催。

食を通して日本とブラジルの架け橋になるべく活動中。

講演会セッションの最後に、洲崎勝国際交流基金サンパウロ日本文化センター所長が初日の活動を締めくくり、ペレイラ博士の協力により、多くの情報を収集でき、非常に生産性の高い1日であったこと翌日午後から行われる意見交換には全員が参加するよう声を掛け、そこで生まれる発見やアイディアに期待寄せた。

EXTRA

この日は、ナカミネ・ショウゾウ・パウルー日伯文化協会副会長のご厚意により、参加者たちに筍料理が振る舞われた。

円卓会議

2020年2月16日
SESC - Unidade Bauru

12名のファシリテーター候補者は3人〜4人のグループに分かれ、農業生態協会「Viverde」で見い出された課題を解決するための対策をグループごとに検討した。初めにソーシャルデザインの定義を一致させ、午前中は意見交換を行い午後に各グループのまとめを発表した。

GRUPO VIVERDE

メンバー：ジョアン・ヴィクトル・ゴメス、ラファエラ・タナカ、メイトラン・エイミー

発表構成：組織体系分析、組織構成の改正、見込み効果の整理

同協会のインフラを徹底分析し、組織構成の最適化が必要である。会員の役割が適正に分担されておらず、会長のジョゼ・マリア氏への負担が大きすぎるという見解を示した。また、大手スーパーマーケットグループのPão de Açucar社と一旦結んだ契約がのちに解除された例を挙げ、内部での管理及び監査が欠けていたと分析した。

考えられる顧客として大学機関、HUB Bamboo、日伯文化協会やペット産業が挙げられ、活動を世間に広めるファシリテーターと生産工程を管理するプロジェクトマネージャーの必要性を指摘した。生産能力の設定、コスト計算や提携先との契約や管理などを担当する人材の必要性が主張された。

主な課題として挙げられたのは、商品の品質・仕上げ、SNSの更新頻度を上げることによる活動内容と商品に対する認知度の向上、組織のこれまでの背景をストーリーの形で発信でき、生産工程も管理できる専門家の必要性である。現在同協会が製作している食器の他、竹苗、竹墨、肥料やペット用ペレットなどが新商品として提案された。

予想される結果は、所得向上に加えそこからの管理を固定費・変動費で分け、インフラ投資を増やし新しい機械や道具の購入である。工房内の保管スペースを増やしスケールアップを狙うことも必要とした。

聴衆となったペレイラ博士は資源の竹栽培にも注意すべきだと指摘した。

プロジェクトマネージャーの募集についてはFacebookを通じて想定で、現地の人材を採用するのが最適であるとした。また管理面においては、財務・会計情報の整理は数ヶ月前から徐々に進んでいるとグループは示した。

最後に、今回のアイディアをジョゼ・マリア会長に伝え、受け入れてもらうために、新たな役職を設ける必要性とそのメリットを同会長に具体的に示すことがグループの課題であるとした。

メンバー：マテウス・ガンバロ・ラモス、エドワルド・ミゲル、シベレ・ミオン

発表構成：集落での現地調査、活動計画、啓蒙活動用インフラの準備、コミットメント向上に向けた活動、営業インフラ。

現地調査を行い主に集落内の情報を収集・整理し、住民の日常生活を理解した上で、「Viverde」と共に実行できる小規模なプロジェクト企画につなげる。活動計画の策定では、営業とマーケティング活動、さらに人事管理ができる提携先を整理する。啓蒙インフラの準備とは、現在の作業場を、工房から啓蒙活動の場とする変更である。主にトイレや休憩所・食事スペースなど、外部の学生や訪問者を受け入れる設備を完備する必要がある。コミットメント向上とは現地の住民と「Viverde」の繋がりを強化することであり、「Viverde」の施設を周辺集落の交流の場にするのが理想である。例えば、子どもが使える竹製の遊び場、公園などが考えられる。営業インフラとしては、原材料と完成品の両方が保管できる多機能倉庫が必要だとし、生産面では栽培作業の強化と加工用の液体タンクの設置が提案された。

組織マネジメントが問題視されるなかで、SENAI（全国工業関係職業訓練機関）やCATI（サンパウロ州農業供給事務局統合技術支援調整局）との提携が提案された。話し合いのなかでは竹栽培の支援金申請も検討したが、竹栽培に関する規定がなく、規定が確立されるまでは困難だという結論になった。工房のリフォームそのものには、竹の要素を重視する必要はないとの意見。

GRUPO HORTO DE AIMORÉS E CULTURA DO BAMBU

GRUPO PROPOSTA PARA VIVERDE

メンバー：ラウラ・カマルゴ・リベイロ・ダシルバ、ムリロ・フルラン・メリオ、藤井勇人

発表構成：組織マネジメントの改善、販売および宣伝施設の提案、新商品開発と福祉活動およびイベント開催。

組織マネジメントは、主に集落内コミュニティと外部との関係構築を図る。その為にまず「Viverde」をNPOとして設立する必要がある。その後役割分担、組織図の見直し、ノルマ設定、スケジュール作成を行い管理・監査システムを導入し、ノルマに対する短期、中期、長期の達成計画をたてる。

販売・宣伝施設についてはオムニチャンネルが提案された。SESCなどでの出店を始め、工芸市場やセレクトショップ、さらには自社サイトやSNSでの販売も検討する。日本のヤクルトレディを参考にし、竹製自転車を使ったタケノコ食品の移動式販売も提案された。

新商品に関しては、市場調査を元に需要分析を行い、集落内で提供可能なサービス/商品を開発する。竹関連商品のみに捉われず、オーガニックな石鹸、ピラシカバ地方の地域限定カシャーサなど商品ラインナップを充実させて間口を広げることにより、竹商品及び竹文化の普及につなげる。福祉活動は、集落コミュニティにおける「Viverde」の認知度向上活動であり、サステイナビリティに関する啓蒙活動とも紐付ける。竹に興味を持ってもらうため、集落内に限定せず、地域全体や外部からでも参加可能なイベントを企画する。

これに対し洲崎勝所長は、祭りが人々を繋げるきっかけになるだろうという見解を示したところ、同グループも祭りの開催が考えられ、竹をテーマとした祭りはブラジルでは存在しないであろうことを強調した。

GRUPO VITA VIRIDIS

メンバー：レオナルド・イノマタ、ガブリエル・フェルナンデス、アンデルソン・ファブリ

発表構成：集落の活動診断、財務管理見直し、受注情報の整理、生産管理の導入、新しいアイディア、同時に推進しうる活動と普及活動

集落の活動診断とは、主にジョゼ・マリア会長の役割と「Viverde」および現地インフラとの関係性を理解することである。さらに竹の年間栽培能力の計算を行った。同グループは、財務管理が最も重要な課題であり、現状では生産コストの計算がなく、損失につながることが多いと考えている。

受注情報の整理では、販売件数を元に分析し、商品を中心におくべきであるとした。「Viverde」は家族経営となっているのが現状であり、ジョゼ・マリア会長が事業の全行程をこなしている。

生産管理に関しては、段階的生産という発想が重要になると考える。

同グループは課題に対し、以下３段階でアプローチした。（1）各家族とその周辺人物たちの自立心を向上させる活動、（2）生産体系は維持しながら管理作業をアウトソーシングすること、（3）こういった外部の人に対し、ジョゼ・マリア会長が抵抗する可能性も議論された。解決案としては外部工場とのリース契約など。

同時に推進しうる活動に関しては、いくつかの事例が挙がった。公共機関もしくは民間媒体を通じた人材募集、商用の提携にとどまらず学校など教育関係機関との提携により「Viverde」の活動を周知する。文化活動を行うためには、既存のパートナーシップ以外に日伯文化協会、SESC、市役所、SEBRAE（小企業・零細企業支援サービス機関）などとの協力が考えられる。同グループは、「Viverde」は竹文化普及だけでなく、竹文化を外部から吸収することも必要だと主張した。

会場からは財務作業改善の必要性に関する質問があり、改善活動が2カ月ほど前から始まっている旨回答した。また、聴衆の中には教育関係の別プロジェクトにて出納係を担当している方がおり、活動内容の簡単な紹介と教育の必要性、財務作業の重要性を強調していた。

最後に文学研究者の洲崎圭子氏からのコメントがあった。大前提としてコミュニティ内の人々の考えを理解する事が重要であるとし、内部の事情や日常を知る本人たちがディスカッションに参加すべきだと主張した。

同氏によると、メキシコのあるコミュニティの事例では、作っていた衣類が約6倍の価値に上があったとのこと。ただし、このような結果を残すには、教育の強化が必要だった。コミュニティの改善活動そのものは内部の動きから生まれたものであった。モチベーションを向上させるためには、現地の人間の声を積極的に聞き、意見交換が必要であることを強調した。

同グループは、洲崎氏の意見に同意し、過去に開催されたいくつかのイベントにおいては、現地の人が家族ぐるみで実現させたものもあった旨回答した。「ProjetoTaquara」始め、Cine Taquaraという集落での映画上映などが例として挙がった。

最後にペレイラ博士を始め、SESC代表、Nipoパウルー日伯文化協会が、イベント参加者に向けて謝辞を述べた。ゲスト、参加者に参加証明書が手渡され、集合写真を撮影した。

この日、洲崎勝国際交流基金サンパウロ日本文化センター所長自らお茶を点て、参加者たちに振る舞った。

観客席からも多くの質問や意見があり、各グループのアイディアが更に深まった。

ワークショップ

竹あかり

2020年2月17日、18日、19日
UNESPバウルーキャンパス

竹あかりワークショップが2月17日、18日、19日にUNESPのバウルーキャンパスで開催された。

竹の取り扱いを伝授すべく、「竹あかり」の演出制作・プロデュース会社CHIKAKEN代表の三城賢士氏と、竹文化の研究者（愛竹家）であり文筆家の橋口博幸氏が日本から招待された。ワークショップの参加者たちはボランティアで、UNESP/「ProjetoBambu」から寄付された１００個の竹茎を収穫、加工した。

参加者はおよそ３０人いた。工程別にメンバーが振り分けられ、最終的大学キャンパス内の図書館前広場に竹あかりを展示し、披露した。

竹あかり祭は、パウルー三線団体の演奏から始まった。その後、ペレイラ博士、国際交流基金サンパウロ日本文化センター副所長 山雄起、三城賢士氏と橋口博幸氏の挨拶と続いた。イベント後半では夢幻郷パウルー和太鼓のパフォーマンスに合わせてワークショップの成果物である竹あかりがライトアップされた。この日のイベントには、およそ200人が参加した。

講演会

竹の用途の多様性

2020年2月18日
SESC - BAURU

2月18日、竹文化研究家（愛竹家）である橋口博之氏が、
プロジェクトの補足として講演を行いました。

Photo: FJSP

橋口博幸さんは講演会で竹の活用について幅広く紹介されました。日本、インドネシアや中国で実施されたプロジェクトについても語られました。

「竹は世界中にあり、人々の生活を古来より支えてきました。竹の特徴は直線でありながら中空で軽く、伐採は容易で、食用にもなります。縦に割くことができ、その繊維は強靭で、成長もとてもはやく、1日で1メートルも成長することもあります。」

竹製品の参考として職人廣島一夫さん（1915-2013）の竹細工製品が紹介されました。

「彼は生涯、人々に日常使われ、かつ長持ちする様々な竹製品を制作しました。とても魅力的なデザインですが、廣島さんが常に重視していたのは『道具』としての「あり方」です。何故なら彼は、『俺（おり）がつくる籠は見るためのものじゃねえとよ。使うためのものじゃ』、と語っていたからです。」

天に向かって伸びる生長力、中空構造、抗菌作用などから、竹は神聖なもの、天と地を結ぶ、　神の依り代として信じられていたと語られているそうです。

「数学者・竹の造形作家である日詰明男さんは竹の柔軟性をこの様な言葉で表現していました。『何かをやろうと思ったとき、　まず竹でできないか、疑ってみると良い』。竹を切って結ぶだけで、様々な工芸品や道具が作れて、さらに『流しそうめん』のような簡単な遊びもできます。

竹は様々な分野の産業的で利用されています。建築素材の製造や燃料として使う場合もあります。他には、食用としてのタケノコ、竹家具だけでなく、竹炭や灰などすべてが活用されています。なかには竹の洗濯用洗剤などもあり、いまでも生活を支える活用が多く見られます。」

橋口さんは講演の最後に「竹の有効利用は地球を救います。竹は民主主義的な素材で人類が使うために生まれてきたのではないかと思うからです。」と語りました。

Photo: FJSP

PROFILE

HASHIGUCHI HIROYUKI

橋口博幸

竹文化研究家（愛竹家）、ライター

1982年、鹿児島市生まれ。武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒業。

2007　年より武蔵野美術大学　に勤務。インドネシアバンドゥン工科大学（ITB）との共同プロジェクト「EDS竹デザイン・プロジェクト」に従事する中で竹と出会う。以来、東南アジア（主にインドネシアを対象）から日本まで連なる竹の文化を対象とした研究・制作を開始。13　年、武蔵野美術大学を退職、14　年より鹿児島に拠点を移し、フリーランスとして活動。

15　年、ジェフリー・S・アイリッシュとの共著『ライフ・トーク―学生たちと歩いて聞いた坂之上の35　名』を南方新社より刊行。（南日本出版文化賞受賞）16　年より「竹あかり」を制作する熊本の「CHIKAKEN」に協力。「竹あかり」演出を全国のイベントや慰霊祭等で手伝う。また、竹炭や竹の建材など竹に関連した事業に協力。17　年、ブラジル・サンパウロで開催された「Japan House」（5月開館）における『竹　―　日本の歴史』展を共同キュレーション。11月、「『大隅アートライブ』展　～カミは“すみ”に宿る～」出展。　18　年、『藤本高廣作品集』（White　Gallery　/　8　月刊行）の取材・編集・デザインを担当。中国・浙江省安吉縣報福鎮統里村において9月に開催された「開竹節」（CHIKAKEN　　演出）協力および統里村のロゴデザイン、情報誌編集・デザインを手がける。

次世代ファシリテーター（参加者）の感想

HAYATO FUJII

藤井勇人

隈研吾建築都市設計事務所ブラジル担当室長

1978年兵庫生まれ。多感な時期をリオで過ごす。リオデジャネイロ日本人学校卒業。
リオのスラム(ファヴェーラ)改造計画で早稲田大学理工学部建築学科を卒業。
その後、日本の建築・デザイン業界で修行をし、30歳でブラジルへ移住。
建設会社勤務時代にジャパン・ハウス　サンパウロの立ち上げに関わり、建築家の隈研吾氏を口説き落とし共に設計を行う。
現在は同氏のブラジル・プロジェクトマネジャーとしてブラジル国内のプロジェクトを担当。
2018年、現行のブラジル国認定建築士(CAU)に日本人として初めて登録を許可される。
建築のみならずブラジルと日本のデザイン・カルチャー全般の交流を促進することを人生の最大の命題にする。

所感

今まで経験したことのないような刺激的な3日間だった。

大学教授、竹製品でビジネスをする企業家、竹の専門家、弁護士、建築家、フードコーディネーター、デザイナー、キュレーター、そして学生など、あらゆる分野の人々が一堂に集まり、竹という一つの素材を通してコミュニティを考えるという試みは今までに聞いたことがなく、全く新しいチャレンジだったと思う。しかも日本からChikakenさんと橋口さんの竹スペシャリストを招聘されたことで、ブラジルだけではない違った文化や習慣から見た別の視点を入れたことで一辺倒になりがちな議論に多様性が生まれたと思う。

当初は参加者が自分の分野の見解や意見を述べるだけで竹というテーマを通して分野を横断した議論をするのは難しいのではと思ったが、「一つのコミュニティをどのように再生させるか」というところに落とし所の焦点を絞ったこと、そして各グループが議論の成果物を発表するというオブリゲーションが与えられたことで各グループ内で目的を持ってディスカッションできた。結果として、各グループのプレゼン内容はそれぞれ違った特色を持ったものになったと思う。

しかしながら、やはり時間的な問題もありプレストレベルの発表で中身が薄かったことは否めず、今後どのようにして各グループで発表した内容に具体性を持たせていくか、そしてどのようにして現場であるAssentamentoの住民の皆さんにヒアリングをして意見を吸い上げていくかが課題である。

今回は正にはじめの一歩であり、一番の収穫はディスカッションできる様々な分野のアミーゴたちに出会えたことである。今後どのように継続していくかがポイントであるが、Roda de Conversaの参加者全員が意識高く継続していくのはなかなか容易ではない。まずは、参加者の中でも問題意識の高く実行力のあるコアメンバーを形成し、彼らを中心に次回のアクションプランを練っていくことが重要であると考える。

最後になるが、今回の企画を考えてお誘い頂いた国際交流基金サンパウロの方々には感謝をしても仕切れない。このような素敵な出会いの機会を頂いて本当にありがとうございました。

LEONARDO INOMATA

レオナルド イノマタ

弁護士 / ブラジル日本青年会議所（JCI BRASIL-JAPÃO）求人部長

レオナルド・イノマタ（30）弁護士。2011年にマッケンジー大学法学部卒業。2015年にはFGV（ジェトゥーリオ・バルガス財団）知的財産権専門コース修了
複数の大手弁護事務所で商標権、特許権、著作権の管理・法的戦略および不当利用や海賊行為対策に携わる。2019年に独立し、イノマタ&ウエハラ弁護事務所を設立。
2018年にJCIブラジル日本青年会議所の部長となり、19年にブルーツリーパーク・リンスで行われた第5回リンス・リーダーフォーラムの調整役として参加した。その際には野口泰在サンパウロ日本領事館総領（当時）とルイザ・エレナ・トラジャーノ氏も参加した。
2020年には、JCI新規メンバーの求人担当となる。さらにサン・ロッケ市で開催予定の第24回桜祭主催委員会の一員でもあり、日本文化の愛好者である。趣味は国際政治やニュースをテーマとするポッドキャストを聞く事。。

所感

今回は、日伯交流次世代ファシリテーター養成プロジェクトに参加でき、とてもポジティブな印象を持ちました。意見交換の方法効果的で、各分野の学生と専門家から多様知識とアイディアを聴けたことには感激しました。

本プロジェクトは3つのパートで構成されていました。（1）問題点を理解するための「Viverde」とUNESPへの現地訪問、（2）多様な専門家の講演を受け技術的な情報と竹の用途を理解し、（3）出題された難解な課題に対し、参加者12人が解決案を提案する。

非常に興味深く価値のあった要素としては、やはり様々な専門性や背景を持つ参加者たちの多様性だと思います。集落の現状を短時間で把握することは難しいので、今回与えられた課題を完全に解決出来る可能性は低いことを、みな理解したうえで、それでも全4グループは努力を惜しまず、戦略を立て解決の可能性を探りました。単体のアイディアのみでは実現性は低いかもしれないが、他の調査とアイディアを合わせることができれば、「Viverde」の活動に変化をもたらすことができると思います。

今後もできる限りファシリテーターとして活動をしたいと考えており、将来の企画にはJCIブラジル日本青年会議所もなるべく巻き込んでいきたいです。

国際交流基金を始め、同じグループのメンバーたちと連絡を取り続け、集落と「Viverde」の課題解決に向けたイニシアチブを維持していきたいです。

やはり活動の影響を受ける側の方々の観点から問題を理解する必要があると思いました。次回の事業への提案として、この理解が適切な解決案を見つけるためには、とても重要なことだと理解しました。

個人的には新たな繋がりができたことが一番の財産となりました。国際交流基金様、ありがとうございました！

MURILO FURLAN MELLIO

ムリロ フルラン メリオ

サンパウロ大学大学院修士課程生日本文化･文学･言語専攻

学歴

2019　サンパウロ大学大学院修士課程生日本文化・文学・言語専攻
2015　UNESP/UNIVERSIDADE DO LIVRO 通信型公開講座　「編集作業：準備と修正」
2010　CELTA 英語教師 UP Language Consultants São Paulo/Cambridge University
2008　サンタ・カタリナ国立大学ジャーナリズム学部卒業

経歴

2020 Instituto Do　共同創設者、文学ワークショップ・瞑想指導者
2018/19 TOPSER Consultoriaコミュニケーション補佐役
2016/18 兵庫県安泰時の曹洞宗修行
2013/16 ブラジル文化省公務員ルアネー法および著作権法の決算報告アナリスト・サンパウロにて翻訳者

所感

このプロジェクトに参加し、様々な可能性を持つ竹という資源を軸に、エコロジーやサステイナビリティを始め経済、社会、文化と、とても多様な知識が吸収できました。ソーシャルデザインの詳細を始めて知ることができ、その可能性も理解できました。

講演会がひとつのハイライトだと思いました。発表者たちの竹に関する知識は深く、専門的な視点で語ってくれました。もちろん入門的な内容でありましたが、観客にはとても豊かな竹文化の全体像が伝わったと思います。ワークショップには参加できませんでしたが、現地コミュニティに良い影響を与えるイニシアチブだったと思います。

現場視察も興味深かったですが、時間が限られていたので多少の物足りなさを感じました。現地のコミュニティ向けに活動をするのであれば、そのコミュニティとの接触と日常の把握がもっと必要だと思いました。

意見交換の部においても、とても有意義な場面がいくつかありました。会の構成（流れ）がとても良く、意見交換が多く、各グループに一人ずつ現地プロジェクト関係者、地元パウルー市からの参加者、外部からの参加者が割り振られたのは最適だったと考えています。様々な分野の人の経験値や、異なる視点を踏まえて交流ができました。

しかし、個人的に不明確に終わってしまったのが、本プロジェクトの目的です。主旨は新しいファシリテーター養成なのか、コミュニティの活性化なのか？もしくは両方なのかが分かりづらかった。ファシリテーター養成が主旨ならば、とてもいいスタートを切ったと思います。理論上の知識に加え、ソーシャルデザインとそのコミュニティが抱える特有な問題点という実践的な課題を知ることができました。なお、コミュニティの活性化がプロジェクトの主旨であれば、そこまで成功したとは言い切れません。現場が抱える課題はかなり複雑なもので、多くの要素が長い時間間隔のなかで絡んでいます。もちろんこの一つの週末の活動はなにかの始まりになるかもしれませんが、本格的に貢献するにはまだ不十分だと思います。

今後への提案としては、こういった主旨を参加者全員に明確に伝えることです。コミュニティの活性化がメインであれば、プロジェクトの期間を長くして、方針と目標を明らかにし、その指標を追う形で行い、できればパウルーの竹あかりフェスティバルをサポートし、パウルー以外の箇所でも同じフェスティバルを広めることができればと思いました。国際交流基金のサポートも含め、竹と日本文化のフェスティバルとなれば、日本のように新しい伝統の始まりになるかもしれません。

日本の文化祭として提案したいのは漫画、音楽、おりがみ、格闘技などのワークショップを社会的な条件が不利な地域内の施設などで開催することです。

MATEUS GAMBARO RAMOS

マテウス ガンバロ ラモス

SMART CAMPUS FACENS（ソロカバ工業大学）所属

学歴

2019 ソロカバ工業大学土木工学部卒業
2019 UniPermacultura - パイオコンストラクション
講演実績
2019/05 Café com Especialista “社会と工学業：私の土木工学の見方を変えたインド”
2019/04TecnoFacens“社会と工学業：“私の土木工学の見方を変えたインド”
2018/04 Global Leaders Covention：“パーマカルチャーとパイオコンストラクション”
2019/12 Fórum Cidades Inteligentes: “パーマカルチャーとパイオコンストラクション - 自然と共に働く重要性”

経歴

2019/08から現在まで　SMART CAMPUS FACENS（ソロカバ工業大学）所属
2019/07まで SMART CAMPUS FACENS　技術補佐
2018/06まで　SMART CAMPUS FACENS　ボランティアインターン
2018/10までインド、コーヤンブットゥール県、Karunya Institute of Technology and Sciences所属

所感

国際交流基金とUNESPのこのプロジェクトに参加できたことは、個人としてもプロフェッショナルとしても、生涯残るものになりました。多様な分野と世代の方々と作業しながらのアイディア交換に、学際的な環境の重要性を実感できました。

まず「Viverde」の現地視察を行い、作業計画と経営事情を把握し、竹文化の啓蒙施設にするための課題と地域住民との連携をどう可能にするかを検討しました。一つの施設の実態を軸に、数々の議題が同時に取り挙げられ、専門家と研究者の講演もあり、とても充実したディスカッションと興味深いアイディアを得ました。

CHIKAKENとUNESPで行った竹あかりワークショップでは１００個以上の照明を作り上げ、キャンパスの広場で披露しました。我々全員が作った竹あかりを、UNESP学生や現地の方々に見てもらうことは、このプロジェクトが称賛されるべきポイントであったと思います。大学の充実した施設とファシリテーターたちの豊富な知識によってこの活動に没頭できました。科学的な面と社会的な面をもったプロジェクトだったと思います。

ディスカッションで意見交換をした方々と今後も集落の改善活動を考えていき、この機会で知り合った全員と交流を続けていく予定です。

国際交流基金にはこのようなイベントに招待していただいたことに感謝しています。刺激をもらい、素晴らしい人たちと繋がれました。こういう機会にはいつでも声をかけてください。

ありがとうございました。

RAFAELA YUMI TANAKA

ラファエラ ユミ タナカ

サンパウロ大学建築都市計画学部

サンパウロ大学建築都市計画学部
2年生
主な研究課題として大都市の建築と自然に屋上緑化がもたらす影響を調べている。

所感

プロジェクトの印象：このプロジェクトを初めて知った時から興味を持っていたので、事前調査もしてきました。Taquara Projectに関して調べながら驚いたのは、竹から作れる数多くの製品と、竹の種類がこんなに多いことです。建築と都市計画を学んでいる身としては、建造材料としての竹に興味を持ちました。耐久性にも優れ、サステイナブルな資源だということも理解しました。

「Horto de Aimorés」集落コミュニティでは竹が収入源となっていることを知り、とてもいい経験になりました。竹は成長がとても早く、一家総出で作業をする姿をみて、コミュニティの開発を促す大きな可能性があることが明確になりました。このプロジェクトでは様々な改善案を模索する時間もあり、コミュニティの将来にとっても価値のある活動だったと思いました。

本プロジェクトで竹文化を知ることができました。日本、中国などアジアで竹は定着していますが、ここまで竹の種類が豊富なブラジルで、竹があまり普及していないことはショッキングなことです。残念なことに竹は資源として過少評価されています。今回のディスカッションや講演会と、大学内の栽培地と集落の現地視察によって多くを学び、竹の可能性と使いやすさを目の当たりにでき、私自身の竹との向き合い方が変わったことをとても嬉しく思います。

円卓会議の感想：文化、建築、料理、芸術と様々な分野で使われる竹を知ることができ、とても充実した時間でした。特に円卓会議では多様な地域から来て変わった経験値をもつ方達との意見交換は、とてもダイナミックで興味深いものでした。

異なる観点と考えが交差し、集落コミュニティの活性化に向けたアイディアに良い影響を与えていくのを実感できました。ブラジルに豊富にある資源が、ここまで柔軟性のある素材だとは想像できていませんでした。個人的には、その柔軟性に最も興味を引かれ、全ての講演の中で注目したテーマでした。その後のディスカッションからも、やはり竹という資源は今後自分の学業のなかでも研究し続けたいとの思いが深まりました。

竹あかりワークショップの感想：円卓会議を終え、竹あかり製作作業に参加できたこと、とても感謝しています。とても忙しい3日間でしたが、私を含めボランティアメンバー全員が竹について学び、チームワークに関しても学ぶことができました。

竹を手で触れながら、全ての作業工程を具体的に体験できたことは素晴らしい経験でした。竹あかりフェスティバルの開会式にみんなの努力の結果を見ることは、特別な瞬間でした。

ファシリテーターとしての将来：　このプロジェクトを経験したことから竹を研究し続けるモチベーションが芽生えました。私の場合は特に土木工事での用途が主軸になります。建築学生としても今回参加できた講演やワークショップでの知識を最大限に生かしたいと思っています。ソーシャルデザイン、サステイナブル建築など、大学では聞きなれないトピックスも個人的に開拓していきたいと考えています。

同プロジェクトの第二回に向けて：次回では竹の柔軟性（使いやすさ）と収入源としての可能性を更に多くの方に伝えるため、大学や文化センターで講演や展示会を行うべきだと思います。

もちろん参加メンバーのスケジュール調整が困難（特に海外からのゲスト）だと思いますが、やはり講演の時間や現地調査の訪問時間を延ばすことができればディスカッションがさらに深まると思います。

素晴らしいプロジェクトに参加させていただき、国際交流基金には改めてとても感謝しています。

GABRIEL FERNANDES DOS SANTOS

ガブリエル フェルナンデス ドス サントス

UNESP大学院博士課程商品開発専攻

学歴
UNESP（FAACバウルーキャンパス）プロダクトデザイン学部卒業
UNESP（FAACバウルーキャンパス）修士課程卒業
UNESP大学院博士課程商品開発専攻（在学中）

主な活動
竹専門家：竹を軸にしたソーシャルテクノロジーが専門、栽培・加工・生産工程を踏まえた技術的な課題解決及び、社会・環境・経済との連携をテーマにしている。
参加型イニシアチブの企画とマネージメント：福祉・教育施設における竹文化の普及講座、竹を軸に収益獲得活動を行う団体との提携など。

所感

国際交流基金、UNESP、SESCが協力してバウルー市で行ったこのイベントは、とても興味深いフォーマットだったと思います。竹文化の専門家をはじめ、教育・福祉機関に所属する方や、バウルー市とその近辺の住民も参加しました。私自身を含め、若者を中心としたこのグループで、参加者それぞれの活動に社会的な意味合いを与えることが出来たと感じました。

一種のケーススタディとして、今回の分析対象になってくれたのが農業生態協会「Viverde」です。「Viverde」とは竹で生計をたてている職人団体で、バウルー市とペデルネイラス市をまたぐ農地改革集落「Horto de Aimorés」内にあります。彼らの活動は2006年にUNESPの公開講座とINCOP協同組合インキュベーターとの協力で始まり、2008年から2018年まではUNESP工学部の「ProjetoBambu」提携していました。

数年もの活動の結果、現地農家における竹の取り扱い能力は向上し、竹栽培を始め、作業小屋を設けることによって竹製の商品開発のインフラを整えました。そこから生まれる商品で収益をあげられるようになり、自給農業以外の選択肢として位置づけられました。

生産技術は定着したものの、「Viverde」はまだその活動普及の可能性を最大限に生かすことは出来ていません。これが本イベントのテーマとなり、参加した若者たちのファシリテーター養成プロジェクトでの課題になりました。情報収集の初日は「ProjetoBambu」の訪問から始まり、「Viverde」の作業小屋で現地調査を終え、SESCでは専門家の講演を受けました。二日目の活動は前日の情報整理から始まり、問題点を列挙し、意見交換と解決案を発表しました。この二日間で参加者たちは竹の作業工程に触れ、現地の社会活動を目の当たりにしました。この経験により、竹に関する視野が広がりました。また、今回得た知識は「Viverde」の存続やそれ以外の活動にも生かせると思います。

参加者たちは積極的に意見交換でき、全体的にはとても将来性を感じさせる二日間だったと思います。ただ、唯一の課題としては、円卓会議に「Viverde」からの参加者がいなかったことです。もちろん一定の距離感を置いて問題を扱うことも良かったかもしれませんが、実際の住民と「Viverde」の職人たちの問題背景を捉え損ねてしまう可能性もあると思います。また、社会活動のなかで適正な判断とは何か、という点を探求したいと思いました。それはつまり、市場の需要に合った経済的な判断か、活動の対象の人たちの希望か、ということです。個人的には両方のバランスが大切だと思います。将来的には分析対象者の声を聞き、事象の背景についての理解を深め、彼らが下す判断と、そこから生まれる責任を全うしてもらうべきだと思います。

EDUARDO MIGUEL

エドゥアルド ミゲル

設計エンジニア

経歴

UNESPバウルーキャンパス工学部土木工学科卒業

UNESP大学院修士課程環境工学環境衛生専攻（在学中）

PROEX公開講座プログラム奨学生、研究課題は「ラミネート竹板製の手作り商品開発と農地改革集落「Horto de Aimorés」内のコミュニティでの知識共有」

「ProjetoTaquara」のボランティアメンバー

主な活動

プロジェクトの企画・計画・管理、作業監督、提携先との交渉、営業と人事採用

作業管理とマネージメント用のコンピューターツール開発

竹を主軸に木工細工のワークショップや講演会などを企画・実行

所感

まずはこのようなイベントに呼んでいただき非常に感謝しています。このプロジェクトに参加できたのはとても光栄であり、嬉しかったです。おそらく他の参加者も同じように感じていると思います。

とても為になる時間を過ごすことができました。ブラジルと日本の両国で、竹に携わりながらで活躍している刺激的で魅力的な方々を知ることができました。異なる背景を持って活躍している専門家たちと出会えたことが、このプロジェクトにおける最大のポイントだったと感じています。 これまでソーシャル・デザインと関わることはなく、学習すべき内容が多くありました。コミュニティと触れあう時間は短かかったですが、それでも参加者は、良い影響をもたらし得る案を出せたと思います。ただし、こういった活動を持続することが重要です。

SESCの施設は非常に充実しており、この連携も正解だったと思います。

私は今後もバウルーで生活し続けます。「Viverde」のメンバーとして、主に建築業界を主として我々のサービスを売り込んでいきます。

JOÃO VICTOR GOMES DOS SANTOS

ジョアン ビクトル ドス サントス

UNESP大学院博士課程デザイン･人間工学准教授

学歴

UNESP（FAACバウルーキャンパス）プロダクトデザイン学部卒業

UNESP大学院修士課程卒業プロダクト設計修了

UNESP大学院博士課程デザイン・人間工学修了

PMD Pro (APMG International) 1級

「Projeto Bambu」での活動

2015年にベレイラ博士を知り、当時の卒業論文のテーマだった下腿義足を竹で作りたいと相談しました。ベレイラ博士の指導のもと、他の研究生たち（ガブリエル、フラビオ、ロドリゴ他）と複数のプロトタイプを作りました。それをきっかけに公開講座「ProjetoTaquara」や農業生態協会「Viverde」と関係が生まれ、トウゴマの樹脂を竹に使う研究や、管理経営作業（ProjetoTaquaraでしょうか）やモニターとしても活動しています。

所感

UNESPのデザイン学部生を教える立場として、バウルーキャンパスでここまで大規模なイベントを受け入れることが出来たのは、非常に貴重な機会でした。文化的な要素はもちろんのこと、技術な側面でも、竹の加工に関する情報や竹あかりの制作工程を学ぶことが出来ました。竹と日本文化の普及ををはじめ、ファシリテーター、専門家とコミュニティの住民が揃って技術を獲得し、新しい収益活動につなげることも考えられます。社会的な影響にとどまらず、経済と環境にも良い影響を与えるイニシアチブでした。

本イベントの構成に関しては、参加者が生産工程の全体像を学べたため、ワークショップにおいても設計と実際の作業に関する理解が深まりました。イベントの進行も完璧で、参加者の大多数が経験したことのない内容でしたが、問題なく進めることができました。

竹あかり祭の準備では、チームワークが強調されました。意見交換やネットワーキングが積極的に行われ、非常に充実した作業空間のなかで新たな友情も生まれました。日本からの講師たちと直接やり取りができ、竹作業に関する彼らの作法を知り、新しい技術と文化を吸収できました。

講演会と円卓会議でおこなわれたたディスカッションは、技術的側面と理論的側面（メソッドや教育方法）の観点から、コミュニティの活性化や学業・ボランティアプロジェクトの内容を見直すきっかけをくれました。今回の竹あかりフェスティバルをきっかけに、SESCとその他施設で展開するイベントを既に企画しています。このように、今後も竹というサステイナブルな資源を継続的に広めていきたいと思います。

最後に、内容と進行ともに記憶に残り参考になるイベントでした。

LAURA CAMARGO RIBEIRO DA SILVA

ラウラ カマルゴ リベイロ ダ シルバ

デザイナー、フォトグラファー

学歴
UNESP（FAACバウルーキャンパス）デザイン学部卒業

「Projeto Bambu」での活動
学部初年からこの講座に興味を持ち、2015年末から2017年末まで（のち一年間は公開講座奨学生として）積極的に参加しました。元々写真を撮っていたので、プロジェクト所属中は活動を写真と動画で記録し、SNS用のコンテンツ作成を担当していました。
プロジェクト内では、学校でのワークショップ、集落内のイベント、栽培地への訪問企画、商品製作などを行ってきました。一年間を通じてワークショップ内容の計画・実験をしながら、学校や大学のイベントで展開する活動を行ってきました。UNESP内のイベントなどでは、活動を支えるための募金活動もしました。

所感

とても興味深く刺激になるイベントに参加できて感謝しています。豊富な意見交換から価値のある案が生まれ、共通した問題点から異なる解決案が導き出されました。

私は「ProjetoTaquara」の参加生でもあり、活動内容はある程度把握していましたが、ベレイラ博士の講演で、教授の様々な研究活動を参加者に紹介出来たのは、とても貴重な機会だったと思います。

講演会で印象的だったのは、まず三城賢士氏が強調した活動の幅広さです。物事を、個人やその場に限定せずに協力しながら作業することは、集落内の「Projetobambu」の今後にとても大切な要素だと思いました。いしづあきこ氏の講演で扱われた筍が、日本文化でとても価値のある食材だと理解した上で、集落内で竹を栽培している住民たちが竹の用途の幅広さと新たな可能性を見いだすことができればと感じました。

こういった意見交換と交流の場を提供していただき、とてもありがたく思っています。次のステップとして、この二日間の内容を集落の住民に伝え、彼らと協力しながら効果的な成果（インパクト）を生み出すことを期待しています。

ANDERSON AUGUSTO FABRI

アンデルソン アウグストファブリ

建築学学部生 / ANGICO DO CERRADOコミュニティ協会所属

経歴
バウルー・シュタイナー学校卒業
UNESP建築学部（在学中）
学部生研究プロジェクト：サステイナブル建造技術研究（植物性バイオポリマー安定剤を使用するアドベ・日干しレンガ）

NPO団体Angico do Cerradoコミュニティ協会での活動
私は2015年から協会での活動を始めました。毎週土曜日現地の子どもたちとアクティビティーを行ってきました。当初からとても真面目な団体で、やる気と将来への希望が強く伝わってきました。
協会は2016年に大規模な土地の所有権を獲得し、そこに会館と、活動に必要な施設の建設準備を始めました。10年以内にその場で持続可能な経済活動を始めることが、土地所有の条件となっています。新会館の設計のため、UNESPの建築学科の教授とともに研究プロジェクトを立ち上げ、2018年から設計を開始しました。
現在協会は、会館とその他施設の建設を実行するため、投資家や他コミュニティに向けて資金調達を行っています。私とケリー教授（　ケリー・クリスティーナ・マガリャエス、UNESP-FAAC教授 ）
が設計の詳細を任されています。

所感

まずはイベント企画委員会を称賛したいと思います。円卓会議の流れや講演会など、とても円滑に行われた印象です。内容を聞き、意見とアイディアを交換しながら問題点や解決案を吸収でき、個人的には議論のテーマに深く集中できました。

現時点では、竹を使った家具や公園の遊具などを作りながら素材の理解を深め、「Horto de Aimorés」集落コミュニティで栽培された竹を使えたらと思っています。Angico do Cerradoコミュニティ協会も今後集落の栽培地と提携し、知識を共有しながらコミュニティの所得源となる活動ができればと考えています。現時点でAngico do Cerradoは会館の設計に集中していますが、それが落ち着いたら、栽培地との協力体制が築けることを期待しています。

次回のイベントも同じ構成でやるべきだと思います。ただ、参加者を若者のみに絞らず、年齢層を広げる必要性を感じました。なぜなら、多くの福祉活動では高年齢の方が多いからです。私自身も若者としての立場から言わせてもらうと、若者が現状を変えようとし、それを具体化するには、年配の方々の経験が必要だからです。

CIBELE MION

シベレ ミオン

SESCバウルー文化ファシリテーター

サンパウロ大学サン・カルロスキャンパス建築都市計画学部卒業
歴史・文化資産、造園、博覧会、舞台装飾などで活動
主に協力した建築事務所：
2010-2012 Apiacás Arquitetos
2012 Barbieri & Gorski ArquitetosAssociados
2012 - 2017 Gomes Machado Arquitetos Associados
現在、SESCバウルーの文化ファシリテーターのサステイナビリティ教育企画担当として、バウルー近辺におけるサステイナブルな活動の調査を行っている。活動実績として、「Viverde」と連携した「デザインと竹建造」などがある。

所感

イベントに関して：このプロジェクトにより、日本とブラジルの知識と経験の交流が実現したと思います。ワークショップ、講演会などを通じて、参加メンバーも各国の社会・政治・文化背景を理解し合いながら物事を進めることができました。竹文化がイベントの軸となり、全員がテーマに集中できました。参加者それぞれの専門分野における活動や研究が今回の対象現場でどう役立つか、さらに社会生活と暮らしそのものの新たな可能性について想起させる内容でした。

円卓会議：現地調査

午前のUNESP竹研究ラボへの訪問では、研究対象としての竹と、その主な研究内容に触れることができました。栽培と加工の技術や、大学側が抱えている課題を知ることは、午後の活動（円卓会議）の予習となりました。

「Horto de Aimorés」集落コミュニティ訪問

「Horto de Aimorés」集落内の「Viverde」では、大学とコミュニティとで共同で行っている活動（研究・啓蒙・知的交流）の実態を知ることができました。現場の職人たちと彼らの活動の背景を知り、さらに協力者全員で立ち上げた竹の作業小屋と、そこで作られる商品及び作業内容を理解し、イベントで扱う課題を理解できました。

講演会：

竹文化を軸に四つの講演が行われました：竹とコミュニティ、竹と建築、竹と芸術、竹と料理

日本とブラジルで見られる竹の理解が紹介されました。ペレイラ博士の「竹とコミュニティ」とCHIKAKEN三城賢士氏の「竹と芸術」では、竹に関する理論的側面、具体的な活動内容、コミュニティとの取り組みなどが説明されました。また、公共教育機関（ペレイラ博士の公開講座）や民間団体（CHIKAKEN）が、民間法人や建築事務所、地方政府とどのように提携してきたかが紹介されました。

発表者全員の共通認識として、共同体を意識して事業を進めるという考え方があると思います。その上で、社会的に脆弱なコミュニティの置かれている状況やその可能性を理解することは重要です。またその地域の状況を分析し、それぞれの住民にストーリーがあるということを認識するのが大切です。マーケットの事情が現代社会の生活に影響を及ぼすことは間違いありませんが、過去に行われた搾取の構造を再現することは許されません。

円卓会議では多様なバックグラウンドを持つ参加者たちが、テーマに対しそれぞれの解釈や提案をしていました。コミュニティの現状を深く語り合うにはやや不十分なスケジュールでしたが、問題解決の第一歩として、とても有効な方法だと思いました。コミュニティの詳細を掴むためには、さらなる視察や会話、聞き取りが必要です。

提案

コミュニティの詳細（特徴・土地の特性・アイデンティティー）を掴むためには住民の声を聞き、共同体の視点から、彼らが抱える問題点を理解する必要があります。そうすれば、提案を考える際に不明確な点が出てきた際にも、現場の視点で語ってもらうことができ、具体的な状況を踏まえた話し合いが可能になります。もちろん深い分析には長い時間が必要です。今回のイベントの主旨は、あくまで多様な人材を集めて新しい取り組みの可能性を模索する第一歩であることは承知しています。それでも、個人的には今後は日数を増やして現地調査、分析、聞き取りの時間を設けられたら良いと思います。 参加者たちのアイディア発表会のフォーマットはよく機能していたと思います。皆お互いを知る時間もあり、それぞれの経験値を生かした提案をしていました。同じ対象現場に対し、多様な視点を持つことができ、アクションを起こすきっかけになりましたし、色々なことを考えさせる環境でした。

国際交流基金の進行は完璧で、イベントに対するコミットメントを強く感じました。予定されていた活動の全てを近くでフォローし、実行してくれました。様々な分野の知識を生かすための場であるということも明確になりました。とても貴重な経験でした、ありがとうございました！

AMY MAITLAND

エイミー メイトランド

デザイナー

2020年 UNESP（FAACバウルーキャンパス）デザイン学部卒業
日本に短期留学
韓国漢陽大学ERICAキャンパス留学（半期）

経歴

ARCA Solutionsソフトエンジニアインターン（4ヶ月）
日伯移民１１０周年記念Festival Kawasujiのビジュアルアイデンティティー作成
バイリンガルスクールMaple Bearインターン（１０ヶ月）
Agência Olive広告・マーケティング会社インターン（６ヶ月）
バウルー日伯文化協会の文化活動SNS・コミュニケーション担当
Mezzani食品のパッケージデザイン

所感

まずこの企画に参加する機会をいただき、感謝しています。イベントが進むなかで、学ぶことが沢山あり、貴重な経験をさせてもらいました。

円卓会議はとても整理されていて、興味深い作業でした。一人で問題に向き合うより、複数人で考え、解決に向けて動く方が得るものが大きいと思いました。ワークショップも最高でした！学ぶことが多く、素晴らしい方たちと知り合うことができ、最終的にワークショップの成果を発表できて、とても嬉しかったです。

新しいファシリテーターとしてイベントを終え、今回得た出会いと気づきは、「Viverde」のみにとどまらず、日伯文化協会や他のコミュニティでも活かせると思います。ここで学んだことは今後様々な場面で応用できるもので、私自身の成長にも繋がりました。視野が広がり、新しいアイディアと可能性が見えてきそうです。

次回への提案としては、各グループの案をまとめ、ブレインストーミングと話し合いの後、具体的な解決策を実行する時間も必要だと思いました。参加者全員の話し合いでまとめたアイディアを「Viverde」で実行できればと思いました。

改めてこのイベントに参加させていただきありがとうございます。またいつでも声をかけてください。

結果

- 事業開催地の農業コミュニティーは様々な問題を抱えており、従来UNESPは工学的、(狭義の)デザイン的見地から支援を行ってきていたが、それらのアプローチでは行き詰まりをみせていた。今回の事業を通し、法律的アプローチ、社会経済的なアプローチや祭り開催等のアートマネージメント的なアプローチからの提言がなされたことで、現状の問題を打破する大きな示唆を与えることができた。基金が守備範囲とする人文的な交流が、技術的な活動に深みを与えながら、実際の地域振興にも寄与したので、非常に有益であった。UNESPからは引き続きの協力関係を求められている。

- 実際に当該地の竹を使った社会プロジェクトを見学してもらい、講師のレクチャー、参加者のアイディアを提案というプロセスを取った。様々な立場から、コミュニティー作りの為の真摯な意見が話あわれ、参加者は専門を超え、共通の社会課題に取り組むことの重要性を認識したようであった。今後、参加者はそれぞれの活動の中で、当事業を通じて学んだ社会的課題への取り組み方法や取り組みの姿勢を継続する事で、事業成果を広く社会に幅広く還元する事が期待される。

- 実技セッションでは「竹あかり」ワークショップを実施した。異なる背景をもった30名ほどのボランティア(対話セッション参加者の一部を含む)が集まり、「竹あかり」を日本の専門家と制作することで、「竹あかり」という新たな日本文化を通し、参加者の間で新鮮な交流が生まれた。参加者からも、日本的な形で「協働」することの重要性に気付いた、という意見が寄せられた。

- 展示会のオープニングセレモニーには約200名が来場し、NIPPOのオーガナイズの元、太鼓や三味線グループが「竹あかり」の前で演奏した。一般層に対して、竹を通じた日本文化を発信する事ができた。

- 橋口氏の講演会は日本と竹文化という人類学的観点を含む、壮大なテーマの講演会であり、竹、エコロジー、伝統工芸、地域社会の復興に関心がある層に遡及する事ができた。

広報素材

ポスター (A3)

SNS用 (Facebook, Instagram e Twitter)

メディア

- **UNESP**
  Oficina de lanternas de bambu ilumina o câmpus de Bauru
  2020年2月20日　掲載
  https://www2.unesp.br/portal#!/noticia/35541/oficina-de-lanternas-de-bambu-ilumina-o--campus-de-bauru

- **SÃO PAULO - GOVERNO DO ESTADO**
  Unesp: Oficina de lanternas de bambu ilumina o campus de Bauru
  2020年2月27日　掲載
  https://www.saopaulo.sp.gov.br/ultimas-noticias/unesp-oficina-de-lanternas-de-bambu--ilumina-o-campus-de-bauru/

- **G1 GLOBO**
  Bauru recebe exposição de lanternas feitas de bambu
  2020年2月19日　掲載
  (http://g1.globo.com/sp/bauru-marilia/videos/v/bauru-recebe-exposicao-de-lanternas--feitas-de-bambu/8334445/)
  http://g1.globo.com/sp/bauru-marilia/videos/t/todos-os-videos/v/bauru-recebe-exposi-cao-de-lanternas-de-bambu/8335480/

SILVIA SASAOKA

(シルビア ササオカ)

企画コーディネーター/竹文化研究者

所感

2020年5月18日

大学と社会のインタラクション

本イベントは2020年2月14日に始まり、30人以上の参加者をSESC BAURUとUNESPパウルーキャンパスに集め開催され、6日間に亘り探求、交流活動が行われました。数十人が同じ空間に集まり、社会的な交流(ソーシャルインタラクション)が促されました。この企画に参加した当事者たちは、そのわずか3週間後に全世界が非常に奇異な状況に見舞われることを、おそらく全く想像できていなかっただろうと思います。ニュースでは「新型コロナパンデミック」が報道され、ソーシャルディスタンスが感染予防対策とされ、他人への思いやりを示す常識となりました。社会的距離間について再考するという観点で、今回のイベント開催は、結果的に非常にタイムリーであったと言っても過言ではないと思います。

将来このような集団活動が尊いものになる可能性を考えると、我々が行った事業のインパクトはさらに大きく感じられます。最後のまとめとして、「次世代リーダーズセミナー　日伯交流ファシリテーター養成プロジェクト -竹がつくる村おこし-」の回想録を残します。

本企画の目的は、日伯間交流・協力を推進しつつ、特定の地域から選ばれた大学、その地域の民間組織及び竹で生計を立てるコミュニティ、それぞれで蓄積された知識を、社会に還元することです。

本企画は2019年の8月の打ち合わせに始まり、国際交流基金サンパウロ日本文化センター、UNESP、パウルー日伯文化協会と何度も話し合いを重ね、ボランティアも巻き込み、方向性を一致させました。イベントの規模と期待される成果を踏まえ、それぞれの役割を明確にし、プロジェクトを進めました。

円卓会議は、国際交流基金がメキシコで行った事例を参考にしました。個人的な役割としては、参加者リストの提案とソーシャルデザインに関するディスカッションを進めることでした。ソーシャルデザインは曖昧な概念として捉えられがちなので、ソーシャルデザインの作業工程を実在のコミュニティに当てはめ、実際に参加者たちに体験してもらう企画としました。全4グループは、現地で浮き彫りになった問題点に対して斬新な解決策を提案したのでこれらの解決策が将来現場のコミュニティの持続可能な開発に繋がることを期待しています。

竹あかりフェスティバルは、かねてより交流のあった竹の研究家である橋口博幸氏に、熊本県のCHI-KAKENと竹あかりフェスティバルを紹介していただきました。日本とアジア全般で竹文化を普及させると同時に、コミュニティを巻き込む活動を行う彼らの存在を知り、その内容を我々の環境に当てはめるべく調整しました。社会的なインパクトを持つアクションを起こしつつも、展覧会として成立する成果物の制作が狙いでした。結果として、ワークショップを行い、竹あかりフェスティバルをUNESPパウルーキャンパスの広場で実現できました。

このプロジェクトを終え、竹は人間の生活を豊かにする材料であるということを再認識しました。参加者たちの「作る」ことに対する熱心な姿勢は、「美しい」を生み出す責任感を芽生えさせ、それが集団活動を意味づけ、物作りへのこだわりを生むことを学びました。竹は文化的な要素も含め、膨大な可能性を秘め、自然との調和を模索し続ける人間という存在に輝きを与えてくれる植物であると確信しています。

作り上げた竹あかり作品は現在も大学の広場で展示されており、コロナ禍が収まり次第、SESC BAURUでの展示が検討されています。

プロフィール

竹研究者、主な研究テーマは木材・竹の加工

竹の加工と社会開発を、デザインの視点で実践・研究

BELAS ARTES SAO PAULO美術教育学部卒業

UNESP大学院FAAC BAURU修士課程卒業(デザイン専門)

UNESP大学院FAAC BAURU博士課程(デザイン専門)(在学中)

CAPES奨学生

国際交流基金奨学金で日本の民芸を研究

NGO InstitutoBotucatu代表

木材・合成木材加工研究グループ所属

デザインと手工芸品を軸に啓蒙活動、イベント、キュレーションを行う

1999-2002 現A CASA -Museu do ObjetoBrasileiro(ブラジル手工芸品博物館)調整役

2002-2011 ARTESOL (ブラジル伝統手工芸品の普及活動を行うNPO)

動画

Bambu:
a revitalização de uma comunidade

撮影: André Sanchez

編集: André Sanchez

ディレクション: Silvia Sasaoka

https://www.youtube.com/watch?v=3A-20J2XYgcM&

Festival Lanternas de Bambu
Unesp Bauru e Take Akari

撮影: André Sanchez

編集: André Sanchez

ディレクション: Silvia Sasaoka

https://www.youtube.com/watch?v=-JMwrtkWyuA4&

主催

協力

Fundação Japão em São Paulo
Av. Paulista, 52 – 3º andar
Bela Vista, CEP 01310-900, São Paulo – SP
Tel.: +55 11 3141-0110 / 3141-0843
www.fjsp.org.br

@FundacaoJapaoSP japanfoundation_sp @fundacaojapaosp